

# ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

# 「雨にも重さにも不運にも負けず」

2019 ARTA DIGITAL Rd.6 AUTOPOLIS  
ALWAYS DO YOUR BEST





阿蘇の山麓には決勝を前に黒い雲が垂れ込めていた。

ARTA が戦うスーパー GT の 2019 年シーズンはいよいよ佳境を迎え、第 6 戦が行なわれるオートポリスへとやって来た。GT500 クラスを戦う 8 号車 ARTA NSX-GT はランキング 6 位につけ、50kg のウェイトハンディを積む。それでも予選では 2 番手を獲得する好走を見せ、タイトル争いの終盤戦へとさらなる加速を見せる。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



GT300 クラスを戦う 55 号車 ARTA NSX GT3 はランキングをリードし、73kg ものウェイトを積んでいるが予選で 7 番手につけるポテンシャルの高さを見せた。若い福住仁嶺がコンディションとマシンセットアップへの適応に苦しみながらもこの位置につけることができたのは、マシンそのものの速さを意味している。決勝でも 2 台ともにウェイトの重さをものともせず速さを見せた。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



8号車のスタートドライバーを務める伊沢拓也がレースエンジニアの星学文に聞く。

伊沢「ベストラップで言うとみんなどのくらい？」

星「17号車が36秒9、伊沢くんが2番手で後ろは38秒4」

伊沢「でもそれはみんな24号車に引っかかっているんだよね？」

星「そうだね、そういうふうに見える」

ウェイトハンディの軽い17号車は、同じNSX-GTでも動きが機敏で小さなコーナーを素早く立ち上がって行く。スタート直後の1コーナーで一旦はトップに立った伊沢だったが、すぐに17号車に抜き返されてしまった。

BRIDGESTONE



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





伊沢「17号車、1コーナーから並んで立ち上がったけど加速が速すぎじゃない？」

星「あそこからの加速が全然違ったね」

伊沢「バランス的にはフリー走行と変わってなくて、速いスピードでコーナーに入っていこうとするとちょっとリア(のグリップ)がないんだけど(ステアリングを)切れないかということそんなこともない。単純にグリップしない。今の差を見るとセクター3は遅い感じがしないけど、ヘアピンとか小さいコーナーへのブレーキングからが遅いんじゃないかなって感じがする」

星「まだ内圧が低いと思うから、上がってくるまで我慢しようか」

伊沢「それもあってもね」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



伊沢のペースは悪くないが、GT300 クラスの周回遅れの出現と雨の降り始めが重なり、じわじわとポジションを落としていく。

伊沢「ゴメン、抜かれた」

星「了解、ここから 300 が出てくるから上手く処理していこう」

伊沢「ちょっと雨が降ってきた」

星「了解、300 はまだ 10 台ちょっといるからね」

伊沢「1 コーナーだけすごく降ってる」



星「1 コーナーでオイルフラッグ、雨量が増えてきました。今ストレート上も結構強くなってきているから気をつけて。

ウインドウがあと 2 周でオープンです。いつでもピットインできるように準備はしておくから。1 コーナー以外はどうか？」

伊沢「了解、1 コーナー以外は大丈夫」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



山の中腹に位置するオートポリスは、コーナーによって雨の降り方が異なる。

そんな中で5位争いの先頭を走る伊沢は、刻々と路面コンディションが変わる各コーナーへと最初に飛び込んで行かなければならない。そして26周目、雨脚が強くなった1コーナーで飛び出してしまった。

星『タイヤ的には厳しい?』

伊沢「減ってる感じはしないけどグリップしないんだよね」

星「このまま続きそうだから入れちゃいます。ハード側のスリックで行きます」

伊沢「ごめん、1コーナーで飛び出した……」

そんな降ったりやんだりの天候が続くと読んでいた星は、当初はドライバーチェンジとともにスリックタイヤへの交換を想定していた。それならば、路面が乾いている部分が多いうちにピットインさせてしまった方が良いのではないかというのが星の考えだった。

しかしコース上で苦戦する伊沢は、ピットインの寸前にその戦略に待ったをかけた。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





34 周目にピットに飛び込み、野尻智紀にドライバー交代を行なうと同時に、8号車にはウェットタイヤが装着された。

星「雨量が増えてます」  
伊沢「これウェットタイヤの方が良いかもよ？」  
星「了解、ウェットで行こう」  
伊沢「ヤバい、ヤバい、ヤバい……」  
星「スリックじゃもう無理？ 17号車はドライを用意してる」  
伊沢「入るよ」  
星「了解、じゃあウェットで行こう」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



一方、55号車のスタートドライバーを務める高木真一はウェイトハンディに苦しみながらもステント全体を見てレースを組み立てていく。エンジニアの一瀬俊浩と会話をしながらタイヤの使い方を考えて走る。高木「コーナーはすごく速いけど、ストレートが激遅だね。GT-Rと比べるとノーチャンスだね。向こうのタイヤが落ちてきてから少しずつ行きます」

一瀬「了解、お願いします」

高木「タイヤの磨耗はフロントとリアのどっちがヤバい？」

一瀬「昨日のバランスでは左フロントでしたね」

高木「リアには余裕があるってことね」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



徐々にポジションを上げていく中、20周目を迎える頃にクールスーツの故障に見舞われてしまった。雨とは言えGTマシンの室内はサウナのような暑さだ。高木はすぐさま次ぎにステアリングを握る福住のことを考えてピットに伝えた。

高木「クールスーツが壊れた、仁嶺はクールスーツ着ない方がいいよ、壊れた」

一瀬「破裂した？」

高木「すごくゆっくり流れてる、全然効かない」

一瀬「今ポジション3、8秒前に7号車。もう少ししたら雨が来るかも知れないのでマックスまで引っ張ります。この後急に土砂降りになるかも知れないから用意しておいて」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



この後のコンディションを睨んで出来るだけ長くスリックタイヤのままステアアウトするつもりだった高木だったが、急に強くなった雨脚に慌ててピットへ飛び込みウエットタイヤへの交換を指示した。

一瀬「あと9周。トップは4号車、8秒先」

高木「8号車、(1コーナーで) 真っ直ぐ行ったぜ? 相当土砂降りになってるぜ、セーフティカーも気をつけて。」

一瀬「走れないようだったら入って来て」

高木「入るよ、入るよ!」

ARTAの2台が時を同じくしてピットに飛び込み、ウエットタイヤに交換してコースに復帰したところでセーフティカーが出動し隊列を整えることになった。

雨脚がかなり強く、レーシング走行ができないほどのコンディションとなっていたからだ。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





 **AUTOBACS**

 **AUTOBACS**

 **an**



**AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI**

**ARTA**



8号車のバトンを受け取った野尻は、速さはあったもののドライタイヤに交換してしまった17号車の前に出て、さらにドライタイヤの数台を簡単に抜き去ることが出来る状況にあった。

野尻「雨がやんだ瞬間に乾いたりするから振り続けて欲しいな」

星「あの混乱の中で17はドライ、先に入ってた3とか36もドライだから、まだ勝負権があるかも」

野尻「はい、そんな感じかなと思ってたんで頑張ります」

星「ウエットを履いているのは6、38、39、64です。後ろの17もドライ、前の23と3はまだピットインしてないからドライ」

野尻「とりあえずよく分からないからスリックのクルマを抜きちゃうって感じだよね」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





一度は弱まった雨だったが、雨雲が通り過ぎるたびに強くなったり弱くなったりを繰り返す。気象レーダー上でもそれを予測するのは難しい。

しかしレース終盤に向けて雨は弱まり、路面は急速に乾いていく流れだった。

野尻「もう雨雲はないんだよね、3コーナーの奥も青空が見えてきてるし」

星「みんなウェットタイヤだからこのまま行くしかない。一番硬いタイヤを履いているからね。レクサス勢は多分1ステップ柔らかいのを履いてると思う。ストレートは乾いてきてるけど他はどう？」

野尻「S字とかは少し濡れてるけど他はもう残ってないよ」


星「了解、最後にドライタイヤでいくっていう可能性もある。路温が下がってきているからソフトで行けるかもしれないから準備しておくよ」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA






野尻「濡れてるのはセクター3だけだね」  
星「了解、ただレーダー上は10分後に雨が来る」  
野尻「1コーナーの奥の方は虹が出てから降ってるのかもしれない」  
星「了解、残り17周です。この状況ではドライで行くのはキツイからこのまま行くしかないね。こっちでタイムは見てるから」  
野尻「セクター3のタイムが上がってきた時点でどうするかだね」  
星「了解、了解。ストレートも雨が降ってきた。もう1周ストレート通過します」  
野尻「もうやろうよ、レース……」  
星「次の周にリスタート、残り15周になります」  
野尻は4位まで順位を上げ、さらに好ペースで前を追いかけていく。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA






しかし路面が乾いてくると、ウェットタイヤは厳しくなってくる。  
そしてドライタイヤに換えたマシンが驚異的な速さで追いかけてくる。  
星「残り3周、前とのギャップ3秒だよ。37号車がドライタイヤで10秒  
くらい早いペースで来てるから、最後に追い付かれるかどうかギリギリ。  
すごくスピード差があるからそこだけ気をつけて。後ろの6号車と64は  
ウェットタイヤだからね、そこは頑張って抑えよう」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA





ドライタイヤの37号車を抑えることはできなかったが、それでも5位でフィニッシュ。  
重いウェイトハンディと大荒れの天候の中でも、ARTA NSX-GTは高いポテンシャルを見せ、  
ARTAの面々も的確な戦略でしっかりとポイントを拾ってみせた。



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





BRIDGESTONE  
HONDA  
ARTA

HONDA  
ARTA

HONDA  
ARTA  
LAUTOBACS  
BRIDGESTONE  
Coca-Cola  
PIT-PRO  
CVSTOS  
ProStaff  
T. NOJIRA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



そして 55 号車のコクピットに収まった福住も、果敢に攻めていく。  
クールスーツが効かない上にドリンクボトルが機能せず、タイラウンドの脱水  
症状の悪夢が蘇る。

福住「ドリンクが出ないかも……走る前に何も飲んでなかったのにい……（泣）。

あと何周くらいあるの？」

一瀬「あと 23~24 周くらい？」

福住「了解。またタイみたいなことになりたくないから」

土屋「仁嶺、雨が上がってるからタイヤを痛めないようにね。

濡れてる間に何台抜けるかだからね」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**



それでも福住は前走車を抜いてトップに立つ。エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市の檄にも一層力が入る。

土屋「良いぞ、仁嶺！メチャメチャ格好いいぞ！」

一瀬「トップだからね、トップ！」

しかしピットアウト時にピットレーンでGT500クラスのマシンに接触しており、ドライブスルーペナルティを科されてしまう。

一瀬「仁嶺ごめん、ドライブスルーが出た。この周に入ろう」

福住「どうして？」

一瀬「ピットでの接触」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





普段はレースエンジニアにレース運営を任せて自身は無線で口を差し挟まない鈴木亜久里監督も、この時ばかりはみすみすアドバンテージを失いそうになっている福住と一瀬に対してアドバイスを送った。

鈴木亜久里「3周以内に入れればいいんだろ!? もっと引っ張って離してから入れれば良いよ！」

一瀬「あと2周引っ張るから全開で行け、全開で！」

福住「何秒くらいロスするの？」

一瀬「30秒。ごめんね、でも6位くらいで戻れると思う。」

65、4、31はギリギリになると思う。頑張れ！」

福住「トップとは何秒差？」

一瀬「トップとはまだ15秒だよ、残り10周フルプッシュ！」

BRIDGESTONE  
HONDA

ARTA



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



6番手まで後退した福住だったが、コクピット内の暑さと脱水症状と戦いながらも攻め続ける。

一瀬「ポジション4、前は10秒先」

福住「後ろは来てる？」

一瀬「3秒後ろ。65号車」

福住「追い付かれるよ、もうペース上げられない、タイヤが終わってるから」

土屋「蒲生が来てるけど今のラップはオマエの方が1秒速いんだよ、頑張れ！」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

ARTA



そして福住はなんとか6位を守ってチェッカーダフラッグを受けた。

一瀬「お疲れ、6位チェッカー」

福住「もう～、勿体ない！」

土屋「悪かった、お疲れさん、良い仕事したよ」

福住「もう本当にダメ……なんだよ……」

一瀬「了解、水と氷を持っていくよ」

土屋「勝てたレースだったな……」

福住「絶対に表彰台はいけましたたね。これが今の自分の実力かも知れないです」

土屋「ピットロードでぶつかったのはこっちのミスだよ、オマエのミスでも何でもない。

走りはすごく良かったよ。また菅生でやっつければ良いんだよ！」

福住「了解」



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





それでもランキングトップは守った。そして次戦ではウェイトハンディが半分降ろされる。最終戦ではゼロになる。悲願のタイトル獲得へ向け、最高のかたちで最後の2戦へ繋げることが出来た。苦しい中でもしっかりと戦い、可能な限り最大限のポイントを持ち帰る。全てのレースでそれができているのが今年のARTAだ。雨と暑さと不運とウェイトハンディで大きな苦しみを味わいながらも、このオートポリスでもしっかりとそれを貫くことができた。





**AUTOBACS**

**ARTA**  
CVSTOS BRIDGESTONE

8

**AUTOBACS**

**ARTA**  
CVSTOS BRIDGESTONE

55



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





 **AUTOBACS**



次の菅生でやっつけば良い。  
悲願成就への最後の一步は、着々と近付いて来ている。

KENWOOD



AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





AUTOBACS  
RACING  
TEAM  
AGURI

**ARTA**





株式会社オートバックスセブン

# ARTA

THE "BIG RACE" FOR SUZUKI AGURI STARTED IN 1998  
AS HIS VISION FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED  
THROUGH THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT,  
ARTA IS RACING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.



ARTA Project



ARTA DIGITAL You tube チャンネル

To Be continued next race...

**ZERO**  
BORDER  
Team ZEROBORDER

©2019 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD